

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：24505

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22592427

研究課題名(和文) 看護プロフェッショナルリズムの育成をコアとする卒後教育システム試案の開発

研究課題名(英文) Development of a plan for the postgraduate educational system centering the cultivation of the nursing care professionalism

研究代表者

澁谷 幸 (Shibutani, Miyuki)

神戸市看護大学・看護学部・講師

研究者番号：40379459

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、プロフェッショナルリズムを発揮できる看護師の育成に必要な卒後教育システムの開発を目的とした。

患者、医療チームメンバーへの面接調査と看護実践現場でのフィールドワーク調査の結果を質的記述的に分析し、看護卒後教育に必要な内容と方法を検討した。結果、ベッドサイドケアや患者と関わる力を育成する教育、チームマネジメント力を育成する教育、専門職業人としての姿勢を育成する教育の強化と、専門職業人としての成長を促す組織文化の構築、看護職としての中長期的キャリア形成の視点に立った教育の必要性が明らかになった。これらを踏まえ、看護プロフェッショナルリズムを育成する卒後教育プログラムを提案した。

研究成果の概要(英文)：This study aims for the development of a tentative plan for the postgraduate educational system that is necessary to nurture nurses who can exercise their professionalism. From the results of the interview research with patients and members of the health care team, and also of the fieldwork, the necessary approaches and methods for the postgraduate nursing education were considered. The result showed the necessity to enforce the education in developing the ability to get involved in patients, the ability to perform the bedside care, the ability of team management and the approach as professional personnel. It also revealed the necessity of constructing the organizational culture to encourage the professional development, and the training not only for new nurses, but also from a mid-to-long-term point of view. On the basis of these necessities, a tentative plan for the postgraduate educational program that cultivates the nursing care professionalism was proposed.

研究分野：基礎看護学

キーワード：プロフェッショナルリズム 看護教育 卒後教育 継続教育 専門性 教育プログラム 組織文化

1. 研究開始当初の背景

チーム医療推進が叫ばれる昨今、患者の療養生活の質を保証するためには、看護師の専門性の発揮が期待される場所である。しかし、すでに専門性が確立している医師や他の専門職に比して、看護職は常に周辺的な位置に置かれ、自らの専門性を十分に発揮しているとは言えない状況にある。看護教育では、看護実践能力の育成が課題となっており、新人看護職員研修やクリニカルラダーが導入されているが、プロフェッショナリズムという観点での教育の検討は十分ではない。特に新人看護職員への教育は、もっぱら看護技術の習得に関心が向けられている。チーム医療推進に向けては、医療チーム内で専門性を発揮できる看護師の育成が必要であり、そのための教育が検討される必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、チーム医療において看護プロフェッショナリズムを発揮できる看護師を育成するための効果的な卒後教育システムを開発することである。そのために以下の目標を設定した。

(1) 医療サービス受益者である患者が求める看護師の専門性を明らかにする。

(2) 医療チームに属する専門職者が考え期待する看護師の専門性を明らかにする。

(3) 看護師がどのようにプロフェッショナリズムを獲得しているか、実践現場における教育の実態を明らかにする。

(4) 上記(1)～(3)に基づき、看護プロフェッショナリズムを育成する卒後教育プログラム試案を作成する。

3. 研究の方法

目標(1): 患者団体代表を通じて入院経験のある加入者に研究協力依頼し、協力が得られた方を研究参加者として「自分が出会ったプロと言える看護師」「看護師にしかできない役割」について面接。その内容を録音し、文字化したデータを質的記述的に分析した。

目標(2): 研究者の関連施設に研究依頼し、同施設に勤務する医療専門職に「看護師の専門的活動」「看護師の活動が活かされた出来事」「看護師の行動や言葉で印象的な出来事」「看護師ならではの活動」「看護師の活動とあなたの職種(または他の職種)との連携」について看護師に期待することについて面接。その内容を録音し文字化したデータを質的記述的に分析した。

目標(3): 看護実践現場でのフィールドワークと、5年以上の臨床経験のある看護師へのインタビューを実施。フィールドノートと逐語記録から、看護実践現場でのプロフェッショナリズムの形成について質的に分析した。

目標(4): (1)～(3)の研究結果を研究者間で検討し、プロフェッショナリズムを育成する教育プログラム・システム試案を検討

した。

4. 研究成果

(1) 患者が認識し期待する看護師の専門性: 2患者団体に所属する8名の患者経験者が研究参加者となった。参加者の語りから【看護実践の特徴と方向性】【職業に対するスタンス】【看護師の人間性】【看護師の役割】の4テーマとその下位の14カテゴリが抽出された。以下、テーマは【 】、カテゴリは< >で示す。

【看護実践の特徴と方向性】では、看護師の実践は、<絆を感じる関わり方><冷静な対応><未来志向の関わり><安心できる技術><個性と状況への即応的で最適な対応>という特徴を備え、患者を<エンパワメント>する方向へと向かう活動が期待されていた。

【職業に対するスタンス】では、看護師のもつ<倫理観><常識と専門性のバランス><自己の原点を備えた一貫性>など、確固たる看護観をもちつつも専門性に偏重しすぎないバランスの取れた姿勢をもつ看護師像であった。

【看護師の人間性】では、看護師は<深い人間理解に基づく洞察力>や<安心感を醸し出す雰囲気><信頼できる雰囲気>をもつ人として、また、【看護師の役割】では、<専門的な第2の身内><患者-医師関係の緩衝役>であった。

以上の結果から、患者は「プロだ」と感じる看護師に対して「関わり方」や「対応」にその特徴を見出していると考えられた。それは、単なる親切心や優しさではなく、深い人間理解とひとの可能性を信じる姿勢を基盤にした信頼関係を築く関わり方である。また、個性に応じることや絶妙なタイミングの見極めなど、即応的な実践も特徴であった。さらに、看護師には他者に安心と信頼を感じさせる人間性や医師をはじめとする他職種との連携調整能力など、高いレベルの人間関係力が求められていることがわかった。

(2) 他職種が語る看護師の専門性: 医療専門職12名(医師4名・作業療法士2名・理学療法士3名・言語聴覚士1名・薬剤師2名)で、平均勤続年数は14.6年(SD=6.18))が研究参加者となった。研究参加者の語りから3テーマ【看護師の専門性の認知】【良い看護師(Good Nurse)の認知】【看護師との連携と協働】が明らかになった。

【看護師の専門性の認知】は、<日常生活行動援助の探求的・独自のな実践><特定の技術が使える治療的援助実践><治療で生じる出来事への適切な対処行動><医学的知識に基づいた観察眼と独自の判断><援助的観点からの患者把握><看護活動の社会的責任の主張><教育と研究への知的探求心><垣根を越えた自律的対話><専門性への不透明感>の8カテゴリで構成され

た。このカテゴリーは、現実の看護実践活動に対する認識と、現実ではないが看護師への期待や要望が混在していた。

研究参加者が語った【良い看護師 (Good Nurse) の認知】は、<患者とともにいる><どの医療者よりも患者を深く理解している><基本的な日常生活行動の援助を引き受けて生活を支援する><日常性を担保しながら援助する><人間的に信頼できる><真摯に看護に向き合う><経験と直観を基にした即座の判断と先を見通した実践ができる><直感力と論理的裏付けで確実な観察ができる><他の専門職に患者目線での自律的な意見と対話ができる><医学的知識に基づいた的確な状況判断と治療的実践ができる><コ・メディカルと協力して一緒に治療処置にあたる><医療チームをマネジメントする><医師の活動を支える>の13カテゴリーで構成された。これらは、看護師の患者を第一義的に考えた行動や意識、看護師自身の人間力や看護への使命感を認める語りであった。さらに、看護師の医学的知識に基づく実践は他職種には自明視されており、それらが、経験に裏付けられた知識や直観という“実践知”として表現されていた。

【看護師との連携と協働】は、<医療チームのマネジメント><治療的方向性の共通理解に立つ実践><医師の治療的活動への参画>の3カテゴリーで構成され、医療チームの中核的存在として看護師が“コーディネーター”や“リーダーシップ”を取る役割と認知されていることが明らかになった。また、医師との協働は、看護師にしかできない活動として強調され語られた。

以上の結果から、医療チームにおける看護職以外の職種は、看護師の専門性を医学知識に基づいた観察や状況判断、治療や処置が確実にできることなどに主眼を置いて認識しており、これは、Good Nurseの姿としても認識されていることが明確になった。一方、患者を深く理解し寄り添いながら患者を支える看護師の姿は、Good Nurseの姿として認識されているものの、看護の専門性とは認識されていなかった。この点は、看護師自身が捉える専門性への認識と大きく異なる点であり、一般的な看護活動における専門性の理解されにくさが再確認できたと言える。<専門性への不透明感>が認識されていることから看護師の専門性が医療チーム内で十分に理解されていない状況が示唆された。これは、患者の理解や、患者を支えるという看護師の専門的活動が、医療チーム内で適切に実践されていない状況を示唆するものである。その理由として、看護師自身が、自らの専門性を意識し、その活動によって把握した課題を医療チーム内で適切に主張できていない可能性が考えられる。看護師が医療チーム内で専門性を発揮していくためには、看護師が自らの専門性を常に問いな

がら実践すること、専門的視点に立って把握した問題を患者擁護の視点に立って主張する力の育成が必要である。

(3) 看護実践現場におけるプロ意識の形成：近畿圏内の2つの中規模病院でのフィールドワークと5年以上の臨床経験をもつ3人の看護師(臨床経験年数6~17年、平均11.7年、平均年齢37歳)へのフォーマルインタビューを実施した。

フィールドワークの結果、看護実践現場における看護プロフェッショナルリズムの育成として、まず、新人看護師教育で実施されるのは、集合研修やローテーション研修などで、研修の目的が看護技術の経験に焦点が置かれる傾向があり、専門職としての姿勢に関する指導者側の関心は高くはなかった。また、患者との関わりなどの看護実践の指導は、アセスメント指導に偏っており、新人がベッドサイドで患者とどのように関わっているかが指導者側に把握されにくい状況にあった。また、指導する看護師にも近年の新人の傾向や基礎教育の実態の理解が不足しており、それが指導困難感につながっていた。2~3年目の看護師には、教育プログラムは準備されているもののプリセプターやリーダーシップ、リフレクションなどの管理的、抽象的な研修内容に偏重していた。さらに、5年目以上になると日常の看護実践を振り返る機会となる研修はほとんどなく、それらの看護師のプロ意識については課題があると認識されているが、対応策は講じられていなかった。

一方、プロ意識が高いと師長、病棟看護師が自負する病棟においては、師長やベテラン看護師の専門職としての誇りが病棟の方針としてスタッフに浸透していた。師長やベテラン看護師は専門職としての意識や良いケアを育てるには、居心地の良い職場であることや人を大事にするスタンスが大切であると考え、カンファレンスや看護計画の指導などで実践していた。この病棟では、看護師として責任ある行動を中堅看護師が新人看護師に指導し、専門的知識を活用した実践への助言がカンファレンスなどで常に行われていた。また、看護の独自性が見える看護計画を立案することが、病棟の価値として共有、実践され、若手看護師に指導されていた。また、看護助手との明確な役割分担が行われ、医師とも対等な関係で働くことなど他職種との関係の持ち方の中に、看護師の専門性への意識の高さが垣間見えた。これらは、患者との関わりを大事にする文化やケアをみんな考え実践する文化の形成につながっており、このような組織において日常的に看護実践を行うことが、看護師のプロ意識の形成につながっていることが示唆された。

5年以上の臨床経験をもつ看護師へのインタビューでは、プロ意識が育つ土壌として【基礎教育での学習】の重要性が挙げられており、その内容は<看護師としての姿勢や意

識が高まる学習経験>や<内省する力><問題意識をもつ力><職業人としての倫理観><看護師が担う責任への覚悟><看護師になる動機>であった。

また【プロ意識が育つ組織】として<病棟看護師全体のプロ意識の高さ><新人を育てようという病棟の雰囲気><患者との関わりを大事にする文化>が、【プロ意識を育てる他者との関わり】として<先輩からの指摘><先輩の看護観に触れる会話><患者との心理的交流><同僚看護師同士での高めあい>が、【自分自身の成長を実感する出来事】として<自分の判断による仕事の采配><後輩との関わりを通じた成長の実感><新しい役割><部署移動や転職>などがあげられた。

さらに、これらの要因は、プロ意識に関連する以下の学びにつながると語られた。

【基礎教育での学習】では、<自分で学ぶ力><自分で判断する力><プロとしての職業倫理>を学んでいることが重要であり、【プロ意識が育つ組織】では、<自分で内省し自己成長する力><プロとして患者に関わるスタンス><意欲的に仕事をする気持ち><専門的な知識や看護観の醸造>が学ばれていると語られた。また、【プロ意識を育てる他者との関わり】では、先輩との関わりでは、<看護への興味><プロとしてのスタンス><仕事への自信><プロとしての自分の目標設定>、患者との関わりでは、<看護のやりがい><患者を守る気持ち>が、同期看護師との関わりでは<自分で考える習慣><覚悟><向上心>が、さらに、【自分自身の成長を実感する出来事】では、<プロであることの自覚><患者への関心><視野の広がり><目標をもつことへの動機づけ>が学ばれ、これらがプロ意識の形成につながっていると語られた。

以上の結果から、看護師のプロ意識は、教えられて学ぶのではなく、考える姿勢を育む組織の中で、先輩看護師の姿を見ながら培われるものであると考えられた。また、そのような組織では、看護師全員がプロ意識を高く持ち、患者中心のケアが文化として根付いていた。このような組織や組織文化の形成は、中堅以降の看護師のプロ意識の様相による影響が大きいことが示唆された。また、看護のプロ意識の形成は、患者への関わり方や姿勢がコアとなっており、これが学ばれるベッドサイドケアでの指導が重要である。これらのことから、看護プロフェッショナリズムを育成する教育には、まず、プロ意識の高い組織形成が必要であり、そのためには新人看護師に限定しない中堅やベテランへの専門性を視点に置いた教育が検討されることが必要であると思われた。また、患者と関わる力や患者擁護の視点に立った実践力を育成するためのベッドサイドでの教育の在り方についても検討される必要がある。

(4)看護プロフェッショナリズムを育成する卒業教育プログラム案:(1)~(3)の研究結果を総合し研究者間で看護プロフェッショナリズム育成に必要な教育プログラムを検討した。

看護プロフェッショナリズムの発揮に必要な能力、資質は<患者中心に実践する姿勢><先を見据える能力と対応力><信頼できる技術><即応的な判断とそれを可能にする観察力><日常生活援助の実践力><患者の潜在力を信じる姿勢><医療チーム内で患者擁護を実践する自律的な姿勢><看護の専門性に対する意識><温かく感性と包容力のある人間性><医師とのパートナーシップを築く力><チームのマネジメント力><診療場面における医学的知識を使った看護実践力><専門職業人としての姿勢>であり、これらを備えるには、医学的・看護学的知識と診療補助および日常生活援助の確かな技術、それに基づく観察力や判断力が必要である。また、実践現場においてそれらを適切に発揮する即応力も求められる。これらは、現場での実践的な経験によって培われると言える。さらに、患者を中心とした医療、看護を実践していく姿勢として患者擁護の姿勢、倫理観が求められる。また、専門職業人として自律的に学び成長していく姿勢や倫理観、チーム医療を推進していくための他職種の理解やマネジメント力が要求されると言える。

これらを育成する教育プログラムとして

新人看護師に限定しない看護師の中長期的キャリア形成の視点に立った看護師卒業教育。特に中堅看護師の専門性への意識を高める研修。

認定、専門看護師など特定の領域、分野の資格習得ではなく、全看護師が備えるべき看護の専門性を適切に評価し教育するスタンスに立ったプログラム構築。

医療チームの各専門職の役割理解を促す研修。

ベッドサイドケアの実践力、特に患者と関わる力を身につける研修。

専門職業人としての倫理的感性や態度の育成につながる継続的な研修。

専門職として成長する文化が根付く組織評価とそれを形成する力につながる研修。

が必要であると考え。以上を踏まえ、現行の卒業教育プログラムに加えて、以下のような学習内容の追加を提案したい。

新人看護師研修に必要な内容：医療チームにおける各専門職の理解・医療および看護における倫理・専門職業人としての倫理・看護職としての自己の目標の明確化・リーダーや師長などの看護管理者の役割理解・ベッドサイドケア(患者との関わり・日常生活援助など)の実践力・看護の独自性が明確になる看護計画の立案につながる研修。

中堅看護師研修に必要な内容：自己の看護実践力や専門職業人としての倫理観を批判

的に評価し自己成長する力につながる研修。
管理者研修に必要な内容：専門職意識の
高い組織を形成する力、その評価ができる力
につながる研修。

本研究の全体計画では、これらを遂行して
いく教育システムを提案することであった。
しかし、看護プロフェッショナルリズムの育成
に必要な要素として、専門職として自律的に
学び成長できる組織文化が必要であること
が明らかになり、まず、その評価が実施され
ることが必要であると思われた。また、教育
システムは、各施設の実態に応じて検討され
構築される必要もあることから、本研究では、
教育プログラムの要素の提案にとどめた。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究は、患者、看護師、医師、薬剤師、
理学療法士、作業療法士など、チーム医療の
各メンバーへの面接調査により看護師に求
められる専門性を明らかにし、その結果に基
づいて看護師の卒後教育プログラムを提案
した。しかし、面接調査の研究参加者となっ
たのは、各集団のうちの少数であり、主に病
院における看護師の活動を想定して語られ
たものであった。したがって、本研究で示し
た看護師の専門性に関する実態や期待がど
のような医療現場においても該当するもの
ではないと思われる。現在、医療が提供され
る場は多岐にわたっていることから、今後は、
様々な現場や医療チームにおける看護職
者のプロフェッショナルリズムの状況につい
て検討される必要がある。また、今回、提案
した教育プログラムも、組織やチームの実態
に応じて応用され洗練される必要がある。さ
らに、本研究で明らかになった中堅看護師の
専門職意識に関する調査や、専門職としての
意識が育つ組織文化の形成と評価に関する
調査も今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

山本直美(代表)、澁谷幸、中岡亜希子、
三谷理恵、他職種が語る看護師の専門性
の様相 経験から描き出された Good
Nurse の姿と専門性への認識、日本看護
科学学会第34回学術集会、2014年11月、
愛知。

澁谷幸(代表)、中岡亜希子、山本直美、
三谷理恵、チーム医療において期待され
る看護師の専門性 患者が語る看護師の
姿から、日本看護科学学会第32回学術集
会、2012年11月、東京。

6. 研究組織

(1)研究代表者

澁谷 幸 (SHIBUTANI, Miyuki)
神戸市看護大学・看護学部・講師
研究者番号：40379459

(2)研究分担者

中岡亜希子 (NAKAOKA, Akiko)
大阪府立大学・看護学部・准教授
研究者番号：60353041

山本直美 (YAMAMOTO, Naomi)
千里金蘭大学・看護学部・教授
研究者番号：70305704

三谷理恵 (MITANI, Rie)
神戸大学・保健学研究科・助教
研究者番号：70437440
(平成25年度より研究分担者)

香川秀太 (KAGAWA, Shuta)
青山学院大学・社会情報学部・准教授
研究者番号：90550567
(平成25年度より研究分担者)

南部由江 (NANBU, Yoshie)
神戸常盤大学・教養部・助手
研究者番号：40633087
(平成25年度より研究分担者)

田村由美 (TAMURA, Yumi)
滋慶医療科学大学院大学・滋慶医療科学大
学院大学・教授
研究者番号：90284364
(平成24年度まで)